

私にも 言わせて! 第129回

生まれ育った鹿児島市に 公衆衛生医師として恩返しを



鹿児島市保健所長
新小田 雄一

1993年5月鹿児島大学小児科入局。鹿児島大学病院および関連病院勤務(主に小児血液・がん疾患、小児救急を担当)。直近の12年間は中核病院である鹿児島市立病院に勤務。2021年4月鹿児島市中央保健センターに異動。2023年4月 鹿児島市保健所長。

小児科医として28年間勤務した後、家庭の事情などもありまして、2021年4月から公衆衛生医師となりました。あまり関心がなかった分野ですが、働き出してから公衆衛生の魅力・面白さを日々実感しています。これからは、生まれ育った鹿児島市に公衆衛生医師として恩返しをしていきたいと思っています。

公衆衛生医師になった理由

「高尚な意識・目標・志があったわけではない」

まずは「期待の若手シリーズ」私にも言わせて!」のコーナーに、50歳半ばの私が執筆していることをお許しください。私は小児科医として28年間ほど、臨床現場で勤務していましたが(直近の12年間は中核病院である鹿児島市立病院にて小児血液・がん疾患診療や小児救急に従事)。その間、公衆衛生にはあまり関心もなく、公衆衛生医師として働くことも考えていませんでした。50歳を過ぎる頃から、夫婦ともに両親が老老介護の状況とな

り、入院患者を担当している病院勤務では、双方の両親のために時間をとることが困難でした。また、不規則な生活習慣(ほぼ夕食のみでかつドカ食い)と、月4〜6回当直(週1回はほぼ徹夜)という28年間の勤務医生活で、自分自身の体調も壊しかけていました。そのような中、当直時に休憩室に置かれていた鹿児島市広報紙「市民のひろば」にて公衆衛生医師を募集していることを知りました。多くの方々に相談し、2021年4月に鹿児島市立病院から鹿児島市中央保健センターへ異動となりました。

公衆衛生医師になって

臨床医時代には保健所に対しては、乳幼児健康診査、小児慢性特定疾病対策事業、感染症や食中毒などの対応をしている行政機関という印象しか持っていませんでした。2021年4月に公衆衛生医師になり、公衆衛生では健康な人々を含めた市民集団も対象となることを実感し、業務としても、母子保健、成人保健(特定健康診査・特定保健指導等の生活習慣病対策、がん対策等)、生活衛生、感染症対策、精神保健福祉、健康危機管理等の幅広い分野があることを改めて認識しました。公衆衛生行政は、行政組織を通じ社会的活動として実践されること、傷病の治療ではなく予防や社会復帰を重視すること、健康に悪影響を及ぼす環境や行動・社会的要因を取り除き健康障害を予防すること、および、

人々の健康状態とQOLを向上させることが目標であると理解しています。

2022年4月からの国立保健医療科学院分割前期研修では、公衆衛生に関して網羅的・体系的に幅広く学ぶことができ、保健所の重要性を再認識しました。全国に同じ目標を持った同期の仲間ができ、科学院の先生方と知り合うことができたことも私にとって貴重な財産となりました。このまま、同年10月からは分割後期研修も履修しています。また、2023年4月に鹿児島市保健所長を拝命し、「法令遵守・公正・公平」を念頭にし、公衆衛生医師としての決意がさらに強まりました。公衆衛生の魅力・面白さを日々実感しており、50歳を過ぎてからも新たなことに挑戦できる機会が得られたことも良かったと思っています。プライベートでは、実母は昨年、実父は今

年に他界しましたが、夫婦双方の両親のために時間を調整しやすくなったことにも感謝しています。

鹿児島市について 「地域診断を含めて」

鹿児島市は市街地から桜島を望む景観がベスビオ火山を有するナポリ市に似ていることから「東洋のナポリ」と称されている、人口60万弱の九州南部の中核市です。当市移住相談室ホームページ(<https://kagosima-ijulife.city.kagoshima.lg.jp/about/about-kagoshimacity/>)では、1.移住者にやさしい・成長可能性都市ライフスタイル別ランキングの2項目で第1位! 2.自然が近い・近くてうれしい自然との距離 3.温暖な気候・気候も人もあったかい 4.食の宝庫・生産地が近く安くて新鮮な食材が豊富 5.温泉が多い・県庁所在地では源泉数が全国第1位 6.史跡・偉人が多い・明治維新のふるさと1のように鹿児島市の6つの魅力を掲載しております。

このように魅力豊かな当市ですが、地域診断では、標準化死亡比

(Standardized Mortality Ratio: SMR)において、脳血管疾患、心筋梗塞、腎不全の死亡率が高くなっています。しかし、これらの疾病のリスク因子となる生活習慣(高血圧症・脂質異常症・糖尿病)の医療費と特定健康診査有所見者割合は全体的に高くありません。特定健康診査受診率が低い(特に40〜60歳代男性)ことから未受診者のリスク者抽出ができていないこと、重症化してからの受診が多いこと等が推測されます。また、メタボリックシンドローム等の発症や重症化が要介護(認知症含む)を助長し、介護給付金や医療費の増大につながっていることも垣間見えました。

公衆衛生医師として 行いたいこと

鹿児島市の公衆衛生医師として理想は多々ありますが、当市の現状を鑑みて、まずは以下に掲げることから取り組んでいきたいと思っています。

1. 後期研修での「鹿児島市国民健康保険の特定保健指導による生活習慣改善効果の検討」の論文作成・当市の特定健康診査受診率は低い

ですが、保健師等の頑張りもあり特定保健指導実施率は健闘しています。特定保健指導により生活習慣の改善が見られることを示せば、特定健康診査の受診率向上および生活習慣病の予防効果が期待できます。

2. フツ化物洗口事業・鹿児島県ではさつま町・薩摩川内市の先行自治体があり齲歯率改善などの良好な結果が得られています。
3. 健康危機管理計画・市街地から桜島までは4 kmほどしかなく、大正大噴火規模の発災がいつ起きてもおかしくありません。

4. 関係団体(鹿児島県保健所、医療機関等)との連携強化・鹿児島県の県型保健所は13か所、市型保健所は1か所です。保健所長(関係部署センター長を含む)10名のうち4名が小児科医であり相談しやすい環境に恵まれました。また、28年間の臨床現場経験から、現場の方々と顔の見える関係が続いています。この人脈を関係団体との連携強化に生かし、現場と行政のつなぎ役も担いたいと思っています。
5. 保健所職員の人材育成・当市保健所の職員は約260名です。

この3年間、当保健所職員は新型コロナウイルス感染症対応に迫られる多忙の中でも、多岐にわたる通常業務も含めて市民のため真摯かつ懇親的に従事しておりました。新米保健所長の私が務まっておりますのも、このような職員のおかげです。

今後も市民目線での持続可能な保健所業務を行っていくためには人材育成が必須です。フォロー・指導体制の充実を含めた働きやすい職場環境を職員と一緒に協力してつくっていくことも私の役目です。また、私は生まれも育ちも鹿児島市で、いわゆる「ジゴロ」です。これからは育ててくれた当市に公衆衛生医師として恩返しをしたいと思っています。

最後に 「鹿児島市の広報担当(自称)として」

当市ホームページ「動画で見る鹿児島市2ch鹿児島市の魅力」(<https://www.city.kagoshima.lg.jp/doga/2ch/index.html>)の観光PR動画にて当市に興味を持っていただき、多くの方々を訪れていただくことを願っております。